

c 3/4号中央制御室の動向

- ① 3号機及び4号機の中央制御室（以下「3/4号中央制御室」という。）では、地震により室内が埃で煙幕を張ったように真っ白になる中、当直は、揺れが収まるのを待って、通常のスクリム対応操作を開始した（資料IV-7参照）。

3月11日14時47分頃、当直は、3号機原子炉が自動スクラムしたことを確認し、主タービンを手動で停止した。

また、4号機については、定期点検中であり、原子炉から燃料を全て取り出し、使用済燃料プール（SFP）に貯蔵していた。

- ② 3月11日14時48分頃、3号機及び4号機について、地震の影響で外部電源を喪失したため、主蒸気隔離弁が自動的に全閉となった。そして、現に定期点検中だった4号機の非常用DGの1機（4A）を除き、3号機及び4号機の非常用DGが正常に自動起動し、当直は、高圧配電盤の非常用母線の電源が回復するのを確認した。

同日14時54分頃、当直は、3号機原子炉が未臨界であることを確認した。

同日15時5分頃、当直は、3号機のRCICを手動（クイックスタート）で起動したが、同日15時25分頃、原子炉水位が高くなり自動停止したのを確認した。

また、この頃、3号機の原子炉圧力が高くなり、SR弁の安全弁機能が働いてSR弁が自動的に開き、SR弁からS/Cに蒸気が吹き出して、S/Cの水温が上昇傾向にあった。そのため、当直は、原子炉格納容器冷却系を起動させることも考えた。しかし、この頃、大津波警報が出ており、仮に、ポンプ起動後に津波が到達すれば、引き波の影響で水位が低下してポンプで水を吸い上げられずに、ポンプが空回りして故障するおそれがあった。そのため、当直は、1/2号中央制御室の当直の対応と異なり、津波が到達する事態に備え、しばらくの間、ポンプを起動させずに様子を見ることにした。

- ③ 地震後、当直長は、当直勤務に従事していた者の安否確認を行ったほか、3号機及び4号機の原子炉建屋（R/B）やタービン建屋（T/B）内部又はその周辺で作業している者に対し、ページング¹⁰で、地震発生と津波について周知を図っ

¹⁰ 構内の非常時連絡や日常作業連絡に用いるための放送・通話設備を指す。